

釜石市とディーニュ・レ・バン市との姉妹都市交流に関する一考察

佐藤 智子*・佐々木 肇**

要 旨 1992年釜石市を主会場として三陸・海の博覧会が開催されたが、博覧会の目玉のひとつが、ディーニュ・レ・バン市で1億9千5百万年前の地層から発見された、アンモナイト化石群の剥離標本(複製)の展示であった。この標本(複製)製作に力を貸したのが、ディーニュ・レ・バン市にあるオート・プロヴァンス地質学研究所であったことが縁で、釜石市は同市を知ることになった。市関係者の相互訪問を経て、1994年両市は姉妹都市提携を締結したが、最初の数年間は児童・生徒の絵画交換交流が続いたものの、2000年以降その交流は途絶えた状態になっている。

本論では最初に、太平洋に面している海の町釜石市と、アルプスの麓にある山の町ディーニュ・レ・バン市がどのようにして知り合ったのかを詳しく解明した。そして次に、姉妹都市提携後どのような交流へと発展していったのか、その軌跡を辿った。さらに、初動期が過ぎると、瞬く間に交流活動が停止状態に陥ってしまった原因はどこにあるのかを考察した。最後に、両市の姉妹都市交流復活の道を探るべく、いくつかの提言を試みた。

キーワード 釜石市、ディーニュ・レ・バン市、姉妹都市関係、国際理解、アンモナイト

I 問題の所在

「人と技術が輝く海と緑の交流拠点」を標榜する釜石市は、2007年市制70周年を迎える。前市長急逝に伴う市長選挙で、11月12日新人の立候補者が無投票で当選が決まり、新市長の下で、新しい市政運営に乗り出そうとしている。また2007年は、同市の産業の支柱であった近代製鉄発祥150周年の節目の年でもある。さらに、悲願であった仙人峠道路の開通や、港湾施設の整備も完了する。都市基盤が整い、飛躍の年を迎えた釜石市は祝賀ムードに包まれている。

しかし釜石市には、そんな華やかな雰囲気から取り残されている部門がある。それは姉妹都市交流の部門である。岩手県釜石市とフランス共和国アルプ・ド・オート・プロヴァンス県ディーニュ・レ・バン(Digne-les-Bains)市は、1994年4月20日姉妹都市提携を締結した。その後数年間は児童・生徒の絵画交換が行われたが、初動期が過ぎるや否やその活動は失速してしまい、2000年以降両市の交流は途絶えたまま、現在停止状態にある。前市長をはじめ、市役所職員、さらに市民、学校関係者が、ディーニュ・レ・バン市のことを話題にすることは、皆無ではないが、極端に少ない。新市長も立候補を表明した際にも、さらに初当選後にも、釜石市の産業振興、大槌町との合併、少子化対策などについては方針を披瀝しているが、彼の口から姉妹都市の名前が発せられてはいない。

本論では、最初に、背景的な知識として、釜石市とディーニュ・レ・バン市の二つの自治体について、地勢、歴史、産業構造などに関する情報を提供する。次に、二つの市がいかなる経緯で、姉妹都市提携に至ったかを辿る。その後、この姉妹都市提携がどのように進展し、そして、休止状態に陥ったかを検証す

* 岩手県立大学共通教育センター 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52

** 東北大学名誉教授、岩手県立大学盛岡短期大学部名誉教授

る。最後に、これら二つの自治体は、姉妹都市提携を再度構築し、交流を活性化することができるのか、その可能性と将来を展望する。

Ⅱ 釜石市とディーニュ・レ・バン市の概要

1. 釜石市の概要

2006年の『朝日新聞』（2006年12月14日付）は、「鉄の街・釜石のシンボルまたひとつ…」という見出しで、かつては不夜城と呼ばれた鉄選鉱場が2008年3月までに解体されることになり、取り壊し工事が進行中であることを報じている。新日鉄釜石製鉄所の第一鉱炉が1996年に解体され、釜石市のシンボルと目されてきた建物が次々と姿を消している。鉄鉱石とともに歩んできた釜石市の地勢、歴史、産業、人口の推移、財政などを、釜石市が2006年12月に刊行した『釜石市の概要』に依拠しながら概説する。

1) 地勢

釜石市は岩手県の太平洋岸のやや南寄りに位置し、東は御箱崎を始めとする諸岬が洋上に突き出し、大槌湾や釜石湾などを形成する。両端には、1,000mを越す北上山地が北から南に走る。隣接する市町は、大槌町、遠野市、住田町、そして大船渡市である。鶉住居川や甲子川などが北上高地を水源として、ほぼ西から東に流れて海に入る。これらの川の流域には小平地が点在するにすぎず、市街地の前方には釜石湾があり、背後三方は急峻な山で囲まれている。2005年1月1日現在、面積は441,323,000m²で、山林・原野が57.4%、宅地が1.6%、畑が1.1%、田が0.5%、その他が39.4%を占めている。

地勢と密接に関係し、釜石市が三大基盤整備と位置づける以下の部門の大規模事業が、2007年度で終了した。港湾部門においては、2006年釜石港湾口防波堤が完成した。津波防災が目的であるが、約1,200億円を費やしたこの事業には、1,000haの広大な水域における養殖漁業などへの活用が期待されている。さらに、釜石港の公共埠頭拡張事業も、2007年春に完成した。機能向上に伴い貨物の積み出し量の増大が見込まれる。道路部門では、釜石市と遠野市を結ぶ仙人峠道路（18.4km）と、国道283号線と仙人峠を結ぶ遠野市の上郷道路（3.4km）が、3月18日に開通した。事業着工から15年、約700億円を投じたこの道路により、内陸部の遠野市との移動時間がこれまで約70分かかっていたが、約20分短縮されることになった。狭いトンネルに加えて急カーブが多く交通の難所と言われた国道283号線に代わる、この新しい動脈の経済効果としては、商業圏の拡大、観光客の流入などが挙げられる。地域振興の切り札として期待が高まっている。

2) 歴史

「鉄と魚のまち」として発展してきた釜石市の歴史を、特に鉄に焦点を当てて辿ってみる。合わせて、鉄鋼業依存の工業都市から、環境をキーワードとした産業都市へ脱却しようという最近の動向も付記する（表1）。

表1 釜石市の歩み

年	事 項
1857	大島高任、日本初の洋式高炉を建設する。同年12月1日、出鉄に成功する。
1874	官営釜石製鉄所の建設始まる。
1880	日本で3番目の釜石鉄道（釜石港—大槌山間）が開通する。
1889	平田村と釜石村が合併して、釜石町となる。
1934	日本製鉄株式会社設立により日鉄釜石製鉄所が発足する。
1937	市制を施行する。人口40,388人。

1955	釜石市、甲子村、鶴住居村、栗橋村、唐丹村が合併する。
1964	釜石市が陸中海岸国立公園に編入される。
1984	三陸鉄道が開業する。
1985	釜石製鉄所第2高炉休止。鉄の歴史館オープン。
1989	釜石製鉄所第1高炉休止。
1992	三陸・海の博覧会開催。
2003	国土交通省から、釜石港がリサイクルポートに指定される。
2004	経済産業省・環境省から、かまいしエコタウンプランが承認される。

3) 産業

表2は、一定期間に市内の経済分門の生産活動によって生み出された付加価値を示す純生産を、1988年度から2003年度まで示したものであるが、その推移を見ると、微増と微減を繰り返している。しかし、大きな産業構造の転換を図りえない釜石市の経済的環境は、決して楽観視できない、むしろ厳しい状況にあると言える。

表2 釜石市内純生産の推移 (百万円)

年	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
	117,305	110,662	111,182	120,194	118,853	121,199	123,021	118,358	1,188,877	116,366
年	1998	1999	2000	2001	2002	2003				
	121,308	131,234	131,164	115,096	112,615	115,757				

(出所：岩手県統計協会、各年度の『岩手県統計年鑑』)

(純生産の算出方法は、「産業+政府サービス生産者+対家計民間非営利サービス生産者-帰属利子」である。十万で四捨五入して表記する。)

①製造業

現在は岩手県南部の自動車産業が岩手県の主要産業と目されるが、かつては岩手県を代表する製造業は釜石市の製鉄であった。しかし、世界的な鉄鋼不況や産業構造の転換などにより、1989年に高炉の火が消えるとともに、合理化で5,000人近い従業員が職場を離れた。製鉄所依存から脱し、新しい産業を生み出すために、80年代以降工場誘致に乗り出したが、誘致した25社のうち残っているのは13社だけという苦戦を強いられている。

2004年度の実績を見てみると、一般機械が31,278百万円、食料品が6,136百万円、プラスチック製品が2,478百万円である。

②水産業

釜石市は、世界に誇る三陸漁場の重要な漁業基地としてかつては活気を呈していたが、国際漁業規制の強化、魚価の低迷などにより水産業は厳しい状況に置かれている(表3)。

表3 釜石魚市場の水揚げの推移 (単位：トン、百万円)

年	1987	1990	1995	2000	2001	2002	2003	2004	2005
数量	27,714	26,028	17,652	17,559	18,202	15,274	15,351	15,894	17,961
金額	10,529	7,899	4,184	4,198	3,751	3,705	2,570	2,879	2,940

(出所：釜石市、『釜石市の概要』、2006年12月、11頁)

2005年度の魚種別水揚げ金額実績を見ると、サケ1,067百万円、スルメイカ394百万円、タコ169百万円となっている。その他には、アワビ350百万円とウニ194百万円が健闘している。一方、養殖ホタテ601百万円、養殖ワカメ480百万円、養殖コンブ139百万円と、育てる漁業も大きな割合を占めていることがわかる。

③観光

釜石市への年間観光客数は1989年に初めて100万人を超え、2000年には110万人に達した。しかし、2001年に100万人を割り込むという激減現象が起こった後、回復がままならず、2005年には約81万人にとどまっている。それを象徴的に物語るのが、釜石市の名所のひとつである釜石大観音の訪問者数である。1994年頃までは20万人という数字を保持していたが、2005年は約93,000人にまで落ちている。釜石市商業観光課は、仙人峠道路の開通を観光振興のスタートとすべく、各種イベントを計画している。また、釜石商工会議所は、「鉄のふるさと創生事業」と題した地域活性化策を打ち出している。史跡や鉄鋼関連産業の見学コースをつくって観光客を呼び込もうという計画で、中小企業庁の「地域資源∞全国展開プロジェクト」に採択されている。

主な観光地としては、鉄の歴史館がある。近代製鉄の基礎を築いた大島高任や、釜石鉱山に関する資料約2,000点を所蔵している。1992年に三陸・海の博覧会が開催された際、集客の目玉となったアンモナイト化石群の剥離標本（複製）が展示されている。また、ディーニュ・レ・バン市から20年間の貸与を受けている（2013年終了）アンモナイト8個も、この施設で見ることができる。鉄の歴史館では、2000年6月から「サイ太郎ニュース」という月間情報紙を発行し、釜石市にゆかりのある歴史上の人物、館内のお宝紹介、イベント情報などを掲載して、釜石市の魅力を発信し続けている。その他の観光地としては、グリーンツーリズムが楽しめる根浜海岸などがある。

4) 人口

2007年3月末現在の人口は42,537人で、ピーク時（1963年）の92,123人と比べると約5万人減少し、半分以下になった。国勢調査の推移を見ると1995年は49,447人、2000年は46,521人、2005年は42,987人という数字が並んでいるので、減少傾向に歯止めがかからない。かつては岩手県の市町村の中で県都の盛岡市に次ぐ規模を誇っていた人口が、4万人を切るのも時間の問題とさえ言われている。65歳以上が人口に占める高齢化率は、1995年が21.4%、2000年が26.4%、2005年が31.2%と、上昇を続けている。一方、2006年度の出生者数は275人で、将来を担う世代の人口は減少傾向を見せている。

釜石市は人口減少の要因として、①釜石製鉄所の合理化、関連企業の縮小、②釜石鋼業所、釜石鉱山の合理化・閉山、③魅力ある就業の場の少なさによる若者の流出、④高等教育機関がないことによる進学者等の流出、⑤出生数の低下¹⁾などを挙げている。

5) 財政

1996年から2005年までの10年間の推移を見てみると、微増と微減を繰り返してはいるが、明らかに減少傾向にある（表4）。

表4 釜石市財政

(百万円)

年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005
歳入	20,078	20,532	20,763	23,058	20,759	19,797	20,423	20,249	19,690	19,703
歳出	19,684	20,175	20,240	22,467	20,326	19,340	19,954	19,909	19,274	19,324
差引	394	357	523	591	433	457	469	340	416	379

(出所：釜石市、『釜石市の概要』2006年12月、30頁)

2. ディーニュ・レ・バン (Digne-les-Bains) 市の概要

1) 地勢・人口

ディーニュ・レ・バン市はフランスの首都パリから南東およそ650kmに位置するアルプ・ド・オート・プロヴァンス県の県庁所在地で、アルプス山脈の麓にある。アルプ・ド・オート・プロヴァンス県は、デュランス川の深い谷、南に向かって開けた平野部、アルプス山脈に続く高い山と、変化に富んだ地形を持つ。この市は、海底から隆起したアルプス山脈とプロヴァンスの平原に挟まれた地勢のため、地質学的に重要な地域であり、アルプ・ド・オート・プロヴァンス地質学保護地帯は、貴重な自然保護地域となっている。

ディーニュ・レ・バン市は標高608mの高地にあり、周囲にアルプスの山々が迫っている。面積は117km² (釜石市の約4分の1) で、人口は約17,500人 (2000年) である。

2) 歴史

ディーニュ・レ・バン市の歴史は、その記録を1世紀まで辿ることができる。プロヴァンス地方とアルプス山脈の中間に位置する戦略的な拠点であったため、幾多の戦いの場ともなり、要塞も築かれた。19世紀初頭には、ナポレオン3世が昼食を取るためによくこの町に立ち寄り、中葉には一時的に彼の臨時政府が置かれた。

3) 産業

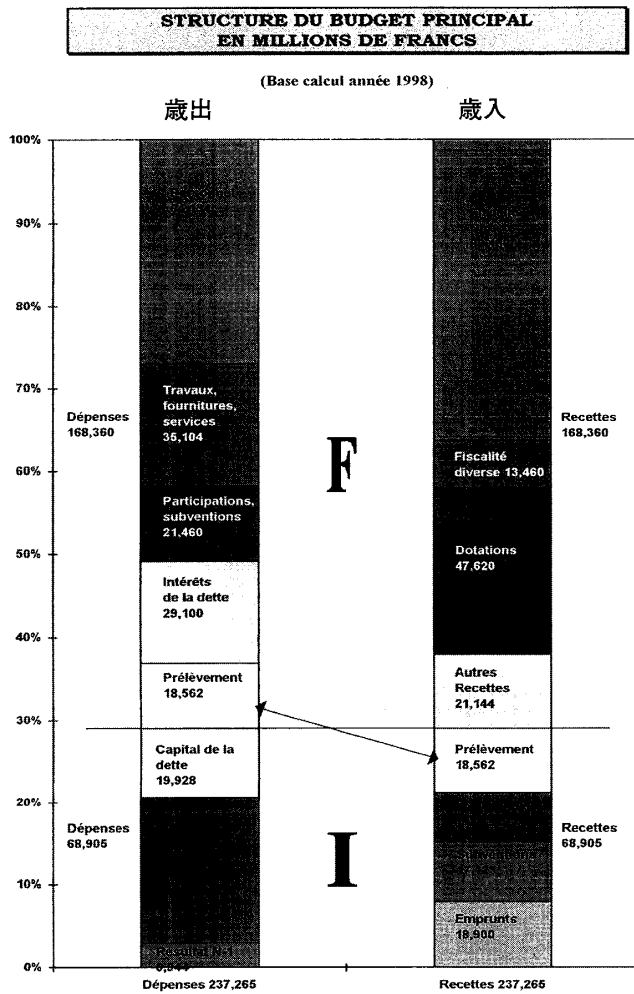
ディーニュ・レ・バン市はその名前の後半が示すように、古代から温泉の町として有名で、リユーマチや呼吸器の治療のために、多くの人がこの地を訪れた。ローマ人たちが去った後、ディーニュの温泉は久しく人気を失ったが、1982年にディーニュ・レ・バン市は温泉施設を再建した。

市の伝統的な産業は農業で、特にラベンダーの産地として知られている。しかし、大きな収益をもたらす産業には発展していない。ディーニュ・レ・バン市の産業構造の概略は、行政関係者が75%を占め、建設業11%、農業6%、その他の産業6%、その他2%である。

インタビューに応じた市役所の地域開発・出納担当者は、この市の特産品が不足していることや、観光客誘致にも進展がないことを指摘した。これらの問題も含めて、地域が抱える難題 (農業の近代化、過疎問題、伝統工芸の保存など) を解消する方策として、ディーニュ・レ・バン市は、同市を中心として広域化と地域連携の試みに取り組んでいる。現在は42の市町村が参加し、若年層への職業指導、農地の整備や管理、同業者間の連携などが行われている。

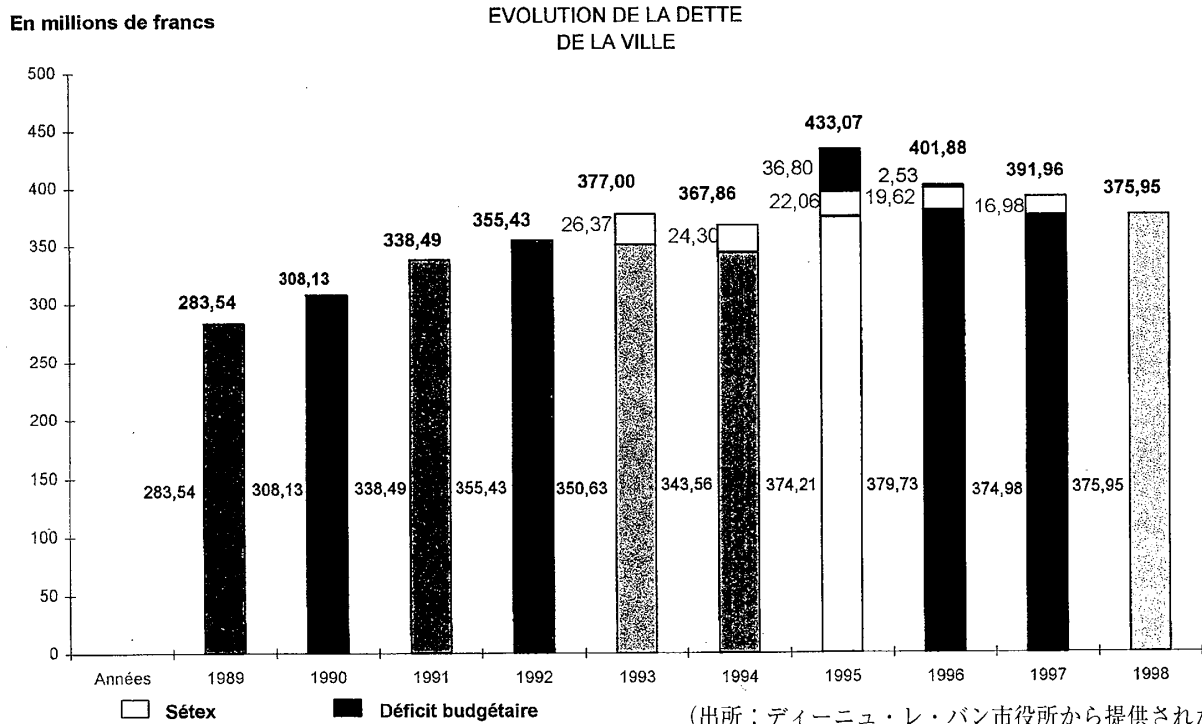
4) 財政

ディーニュ・レ・バン市はアルプ・ド・オート・プロヴァンス県の県庁所在地で、官公庁の町という特色が強いため、1998年度を例にとると、人件費が支出の約3割を占めている (図1)。市の負債額も、1989年度から1998年度までの10年間を見ると、前半は増加の一途をたどり、1995年度にピークに達した後、微減の傾向を見せている (図2)。



(出所：ディーニュ・レ・バン市役所から提供された資料)

図1 1998年度のディーニュ・レ・バン市の歳入・歳出



(出所：ディーニュ・レ・バン市役所から提供された資料)

図2 ディーニュ・レ・バン市の負債の変遷 (1989年～1998年)

Ⅲ 釜石市とディーニュ・レ・バン市との姉妹都市提携への道

釜石市は1994年4月20日、フランスのディーニュ・レ・バン市と姉妹都市提携の調印を行った。三陸海岸の鉄と漁業の町釜石市と、フランス南東部プロヴァンス地方の、アルプスの山間にあるラベンダーとかつての温泉の町ディーニュ・レ・バン市が、どのような経緯で姉妹都市提携に至ったのか、その軌跡を辿る。

1. 三陸・海の博覧会

1) 三陸・海の博覧会概要

名称：JAPAN EXPO IN IWATE '92 三陸・海の博覧会

会期：1992年7月4日～9月15日（74日間）

会場：釜石市（主会場）、宮古市・山田町（共催会場）

各会場の特色：釜石会場（「海と未来のワンダーランド」）、宮古会場（「マリンリゾートランド」）、山田会場（「遊コミュニケーションランド」）

入場者数：2,005,281人（釜石会場1,324,594人）

メインテーマ：光る海、輝く未来

ねらい：二一世紀に向けてより以上の発展を期し、地場産業の育成や観光の振興、海洋開発や国際交流を計る。また海洋バイオや航空宇宙基地構想の促進等により、三陸沿岸地域の活性化をいっそう推進するために開催する²⁾。

2) 三陸・海の博覧会と地方振興

岩手県は1992年に、釜石市を主会場、宮古市と山田町を共催会場として、「釜石市を含めた沿岸部の振興と住民の意識を高揚し、結果として県土の均衡ある発展を目指そうという意図³⁾」を持って、三陸・海の博覧会を開催することを決定した。1981年に開催された神戸ポートアイランド博覧会が1,610万人の入場者（純益60億円）を数え、大成功裏に終わった後、これが刺激剤となって、各地で地方博覧会が催されるようになった。1988年と1989年には年間15件もの博覧会が開催され、東北地方でも、1987年に「'87未来の東北博覧会」（宮城県仙台市）、1989年に「'89グリーンフェアせんだい」（宮城県仙台市）、同年に「おみやげザ・ワールド山形100フェスティバル」（山形県）が開催された。岩手県が博覧会の開催に乗り出した1992年には、岩手県も含めて全国で4件とすでにブームは過ぎていたが、地域振興を目的として、三陸・海の博覧会を実施に移した。総合プロデューサーの次の言葉が、それを裏付ける。「この博覧会は、これまでの地方博とは趣旨が異なり、通産省の提唱するジャパンエキスポ制度⁴⁾にのっとった地域振興博なのです。というのもメイン会場となる釜石市は、新日鉄の鉱炉閉鎖後は、かつての十万人いた人口が六割以下に落ち込んでしまいました。そこで新しい視点で釜石を活性化するためのプランはどうしたらいいか。その答えが、地の利を生かして海洋技術都市をめざす、ということなんです⁵⁾。」

3) アンモナイト化石群の剝離標本

人々の足を会場に向かわせるためには、目玉となるものが必要となる。そこで、主会場のテーマ館に、アンモナイト化石群の剝離標本を展示しようということになった。なぜアンモナイトの展示となったのかについては、2000年3月、私たちが現地調査のため釜石市を訪れた際、市役所の担当者は、「アンモナイト化石群の剝離標本というアイデアは岩手県が出したもので、政治的に釜石市が明るい話題を欲していたからではない」と説明した。

アンモナイト化石群の剝離標本に関して、釜石市（岩手県）側との対応に当たったのは、ディーニュ・レ・バン市にあるオート・プロヴァンス地質学研究所（Centre de Géologie）であった。2001年1月、私たちは調査のためこの研究所を訪問したが、インタビューに応じたのは、所長代理のジャン・シモン・ページ（Jean-Simon Pages）氏であった。彼によれば、三陸・海の博覧会の展示用に、釜石市は、ディ

ーニュー・レ・バン市で1億9千5百万年前の地層から発見されたアンモナイト化石群のスラブ（剝離標本）の購入を申し入れた。地質学研究所側は、このとてつもない申し入れを拒否した。しかし代案として、アンモナイト化石群の剝離標本の実物大（12m×16m）の複製（レプリカ）を作ることを提案し、地質学研究所の研究者たちが作製の技術指導に当たることを条件として提示した。

釜石市はこの提案を受け入れ、1992年5月10日に、アンモナイト化石群の剝離標本（複製）設置工事のため、地質学研究所の所長他7名の技術者が釜石市にやって来た。この年の7月3日には、三陸・海の博覧会の開会式に出席するため、ディーニュー・レ・バン市のあるオート・プロヴァンス県（ディーニュー・レ・バン市は県庁所在地）の県議会第一副議長一行9名が、釜石市を訪れた。この際に、博覧会終了後のアンモナイト化石群の剝離標本（複製）の取扱いについて、釜石市長と地質学研究所長との間で話し合いが持たれた。釜石市としては、博覧会終了後、剝離標本（複製）を盛岡市にある岩手県立博物館に売却する意向であったが、研究所側は、釜石市に置かれなければ意味がないと主張し、結局釜石市はそれを市の「鉄の歴史館」に移籍することとした。

2. 姉妹都市提携の申し入れ

アンモナイト化石群の剝離標本（複製）の移籍保存については、ディーニュー・レ・バン市側から技術協力の意向が示された。その際、両市の児童・生徒の絵画交換などの国際交流についても話し合われた。三陸・海の博覧会が終了した翌年の1993年2月に、釜石市助役を団長とする一行7名が、ディーニュー・レ・バン市を表敬訪問したが、この際ディーニュー・レ・バン市側から、アンモナイトの化石を釜石市に貸与する可能性が伝えられた。そして10月になって、釜石市はディーニュー・レ・バン市から、アンモナイトの実物化石を20年間貸与するという知らせを受けた。そして11月に入って、アンモナイト化石群の剝離標本レプリカ設置工事のため、地質学研究所長他7名が釜石市を訪れた際に、ディーニュー・レ・バン市から8個のアンモナイトが届けられた。これを機会に釜石市長は、ディーニュー・レ・バン市に、姉妹都市提携を志向している旨を非公式に伝えた。

1994年に入って、釜石市とディーニュー・レ・バン市との姉妹都市締結に向けての動きは、急速に進展する。1月1日に釜石市長はディーニュー・レ・バン市長に、姉妹都市提携に関して親書を送り、市長の釜石市訪問を要請した。一方、2月には市長の諮問機関である釜石市国際交流推進談話会は、ディーニュー・レ・バン市との姉妹都市提携を承認した。同月、釜石市長はディーニュー・レ・バン市より両市の姉妹都市提携について、前向きな親書を受け取った。そして翌3月17日の平成6年（1994年）3月釜石市議会定例会で、ディーニュー・レ・バン市との姉妹都市提携の議案が可決された。一方、ディーニュー・レ・バン市側では、4月13日の市議会において、釜石市との姉妹都市提携案を可決した。その結果、ディーニュー・レ・バン市長一行8名を釜石市に迎えて、4月20日両市の姉妹都市提携調印式が挙行された。

なお、両市の姉妹都市提携調印までの交流は、ディーニュー・レ・バン市側からは、アンモナイト化石群の剝離標本（複製）設置工事関連と、三陸・海の博覧会開会式への出席を含め3回あった。しかし、釜石市側からのディーニュー・レ・バン市への訪問は、1993年2月の釜石市助役一行の表敬訪問が1回あっただけである。両市の国際交流の先駆けとなった児童・生徒の絵画交換は、1993年12月に、釜石市からディーニュー・レ・バン市に58点送られ、翌年1994年3月に、今度はディーニュー・レ・バン市から釜石市に60点が送られた。このように、姉妹都市締結前には各1回だけ行われ、両市で絵画の展示会が開催された。

Ⅳ 釜石市とディーニュ・レ・バン市との姉妹都市提携の目的

下記が、「盟約書」の全文である（日本語分）。

盟約書

日本国岩手県釜石市とフランス国アルプ・ド・オート・プロヴァンス県ディーニュ・レ・バン市の両市は、相互信頼の原則に基づき、教育、文化、産業、経済、スポーツ、観光など各分野における交流を通じて、両市間の相互理解と友好を深め、もって両国の親善に寄与し、ひいては世界の平和と繁栄に貢献することを希求し、ここに姉妹都市として提携することを盟約する。この盟約書は、日本語及びフランス語で作成する。

1994年4月20日

日本国岩手県
釜石市
市長 野田武義

フランス国アルプ・ド・オート・プロヴァンス県
ディーニュ・レ・バン市
市長 ピエール・リナルディ

釜石市とディーニュ・レ・バン市との姉妹都市提携盟約書には、提携の意図・目的として、「相互信頼の原則に基づき、教育、文化、産業、経済、スポーツ、観光など各分野における交流を通じて、両市間の相互理解と友好を深める」とあるが、締結日の1994年4月20日に先立って、両市の間で具体的な細目についての打合せや協議が行われた形跡はまったくない。なお、この盟約書にしても、姉妹都市提携で先行した岩手県の他の自治体のそれ——例えば、江刺市、金ヶ崎町——と大同小異であり、初めに理念ありという感は否定しがたい。この盟約書を始めとしていかなる文書においても、姉妹都市交流における、釜石市の独自性を垣間見ることができない。

盟約書調印以前に、釜石市とディーニュ・レ・バン市の間で話し合われた具体的な国際交流があるとするれば、児童・生徒による絵画交換と、ディーニュ・レ・バン市から釜石市にアンモナイトの化石を20年間貸与するということの二つだけであった。

Ⅴ 姉妹都市提携を結んだ背景

1. 釜石市

1) 頻度を増した釜石市とディーニュ・レ・バン市との接触

釜石市とディーニュ・レ・バン市は、「人類が誕生するはるか太古に栄えた『アンモナイト』を通じた出会いにより結ばれ、姉妹都市の提携をすることとなった」と、釜石市の資料「ディーニュ・レ・バン市のあらまし」に記されている。すでに見てきたように、釜石市がディーニュ・レ・バン市を知るきっかけは、1992年に開催された三陸・海の博覧会のテーマ館に展示するアンモナイト化石群の剝離標本を入手することであった。

アンモナイト展示という発想は、岩手県から出されたが、ディーニュ・レ・バン市との交渉には展示責任会社が当たった。「岩手県側は最初から実物のアンモナイト化石群の剝離標本と、3,000個の化石の購入を申し入れた」とは、オート・プロヴァンス地質学研究所長代理の言葉である。しかし当然のことながら、アンモナイト化石群の剝離標本等の売買交渉は成立せず、その代わりに、ディーニュ・レ・バン市側の全面協力という条件付きで、アンモナイト化石群の剝離標本のレプリカを釜石市で作製し展示するという事になった。ということで、アンモナイト化石群の剝離標本複製の設置や移設工事のために、地質学研究所

長と工事関係者7名が2回にわたって釜石市を訪問し、また、1992年7月の三陸・海の博覧会には、アルプ・ド・オート・プロヴァンス県議会第一副議長一行9名が参列した。一方釜石市からは、釜石市助役を団長とする一行7名が、1993年2月にディーニュ・レ・バン市を表敬訪問した。このような交流接触の中で、釜石市とディーニュ・レ・バン市の間で児童・生徒の絵画交換による国際交流という話や、後者がアンモナイトの化石を前者に20年間貸与するという申し出が生まれた。アンモナイト化石群の剥離標本（複製）設置などで、フランスから関係者や技術者が釜石市を訪問したことは、同市に国際交流の進展を実感させる十分な契機となり得た。

2) 自治体の姉妹都市提携ブーム

日本において国際姉妹都市提携自治体数が、大きな伸びを見せたのは、1980年代後半から1990年代中葉である。岩手県の地方自治体において姉妹都市提携が盛んに締結されたのは、全国的な潮流とほぼ同じである（図3）。

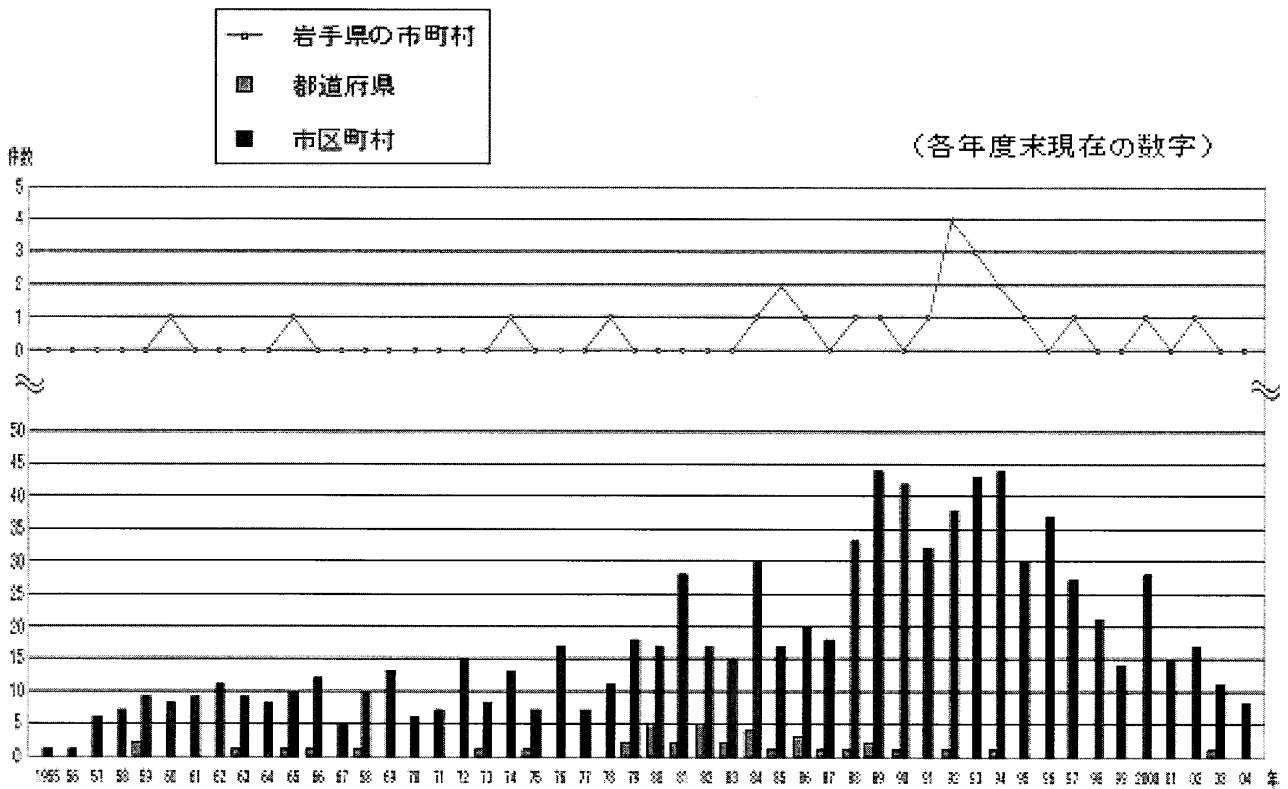


図3 年度別姉妹自治体件数の推移（各年度末現在の数字）

（出所：財団法人自治体国際化協会編、『日本の姉妹自治体一覧2005』、2005年、135頁をもとに作成）

平成の市町村合併が開始される以前の2004年3月末現在、岩手県内58市町村のうち9市8町2村が、海外12カ国25市町村と姉妹都市提携を結んでいるが、1991年から1997年の間に、これら25の海外の市町村のうち、約半数の12市町村と関係を確認した。ということは、釜石市がディーニュ・レ・バン市と姉妹都市提携を結んだ1994年は、岩手県の自治体に、いわば、姉妹都市提携の強い誘い風が吹いていた時期である（表5）。

表5 岩手県の自治体の姉妹都市提携状況（1960年～2005年）

順位	年 月 日	姉妹都市提携市町——相手先（国名）
1	1960年10月5日	久慈市——フランクリン市（アメリカ）
2	1965年4月14日	大迫町——ベルンドルフ市（オーストリア）
3	1974年10月25日	北上市——コンコード市（アメリカ）
4	1979年3月3日	江刺市——シェパートン市（オーストラリア）
5	1984年8月8日	遠野市——サレルノ市（イタリア）
6	1985年5月23日	盛岡市——ビクトリア市（カナダ）
7	1985年5月25日	北上市——三門峡市（中国）
8	1986年10月8日	石鳥谷町——ラットランド市（アメリカ）
9	1989年2月1日	金ケ崎町——長春市（中国）
10	1989年7月9日	久慈市——クライペダ市（リトアニア）
11	1991年6月7日	江刺市——ロイテ市 & ブライテンヴァング市（オーストリア）
12	1992年8月6日	岩泉町——ウイスコンシン・デルズ市（アメリカ）
13	1992年8月7日	新里村——ラ・トリニダッド市（フィリピン）
14	1992年8月12日	大船渡市——パロス・デ・ラ・フロンテラ市（スペイン）
15	1993年1月15日	花巻市——ホットスプリングス市（アメリカ）
16	1993年7月27日	藤沢町——デュアリング郡（オーストラリア）
17	1993年8月18日	金ケ崎町——アマースト町（アメリカ）
18	1993年10月26日	宮古市——烟台市（中国）
19	1994年4月20日	釜石市——ディーニュ・レ・バン市（フランス）
20	1994年11月13日	松尾村——アルテンマルクト町（オーストリア）
21	1995年7月22日	矢巾町——フリモント市（アメリカ）
22	1997年11月25日	紫波町——ポーテージ市（アメリカ）
23	2000年5月13日	山田町——ザイスト市（オランダ）
24	2002年9月28日	金ケ崎町——ライネフェルデ・ヴォアビス市（ドイツ）
25	2005年6月20日	紫波町——スタンソープ・シャイヤー市（オーストラリア）
26	2005年10月15日	大槌町——フォートブラッグ市（アメリカ）

岩手県の自治体における海外の都市との姉妹都市提携は、1960年が1件、1961年～1970年が1件、1971年～1980年が2件、そして1981年～1990年が6件と増えている。さらに1991年～2000年は13件と激増し、特に、1992年から1994年に集中している。アンモナイト化石群の剝離標本（複製）の設置工事に関連して、ディーニュ・レ・バン市からの関係者や技術者たちが釜石市を訪れることにより、市長に姉妹都市提携という考えが芽生えたとしても、時流を考慮すれば自然なことである。さらに、釜石市がディーニュ・レ・バン市と姉妹都市提携を結んだ1994年以前、沿岸部で姉妹都市を持っていたのは、久慈市、岩泉町、大船渡市、宮古市の4自治体だけであり、多くの自治体は岩手県の内陸部に位置していた（参考資料の「2. 釜石市の位置」を参照）。沿岸部の活性化、あるいは明るい話題作りのためにも、釜石市長が姉妹都市提携という一発花火を打ち上げようと考えたのも首肯できる。

2. ディーニュ・レ・バン市

1) 国際理解と観光誘致

釜石市から姉妹都市提携の申し入れをうけたディーニュ・レ・バン市は、それをどのように受け止めたのか。地質学研究所長代理によれば、地理的な距離や言語の問題はあるが、「アンモナイト化石群の剝離標本（レプリカ）の設置を通して、日本、特に釜石市と新しい関係を結びたい」、と当時の市長は思った。また、フランスというと、パリ、ニース、モンブランといった大都市や観光地が思い描かれるが、プロヴァンスの山間の町ディーニュ・レ・バン市に釜石市民がやって来て、フランスの風景や地質、フランス人の気質や文化・伝統について学んで欲しいと、市長は考えた。つまり、新しい形の観光客誘致が、市長の頭にあった。しかし、釜石市との姉妹都市提携締結時には、友好を深め、相互の理解を促進する、という理念を掲げただけで、それをどのように遂行していくかについての具体案はなかった。

2) 経済交流

ディーニュ・レ・バン市役所の姉妹都市担当者によれば、釜石市との姉妹都市提携で、ディーニュ・レ・バン市は経済的な交流も望んでいた。1998年秋に釜石市に、展示用としてディーニュ・レ・バン市の特産品を送ったが、何の反応もなかった、とのことである。彼女は、フランス人は遠い日本に強い関心と興味を抱いているが、遠距離のため旅費が問題であると指摘した。

3) 「共和国の地方行政に関する指針法」の公布

フランスにおいて1992年2月6日付で、「共和国の地方行政に関する指針法」が公布された。それは、①地方における国の行政組織について、②地方行政の民主化について、③地方自治体の間協力について、④地方自治体等による国際協力について、という4つの柱から成り立っている。特に、④地方自治体等による国際協力についての中から、第131条を取り上げる。

地方自治体およびその広域行政組織は、その権限の範囲内において、かつフランスの国際協定を尊重する限りにおいて、外国の地方自治体およびその広域行政組織と協定を結ぶことができる。

これらの協定は、前述の1982年3月2日の法律第82—213号第2条第1項、第2項で定められた条件により、国の代表者に伝達されたときに、効力を発する。

この条文は、県、市町村、広域行政組織は、外国の自治体およびその広域行政組織と協定を締結することができること謳っている。「フランスの地方自治体の国際交流—その理念と現状」と題された『クレアレポート』第45号の解説によると、「協定の締結にあたり、政府の許可制を廃止し、国の代表に伝達するだけで効力が発生することとし、手続き上も簡素化が図られた⁶⁾。」フランスの地方分権化改革は1982年以降大きく前進するが、それ以前は、例えば、姉妹都市提携に関しては、県知事の事前の認可が必要であり、また、県知事への公式な届出が義務付けられていた（1956年1月24日交付の関係法規）。さらに、姉妹都市は以下の場合のみ認められていた。

- ①人口規模がほぼ同等であること
- ②団体の性向が似通っていること、あるいは補完的であること
(生活様式や生活水準などについて、共通点があること)
- ③地理的に遠すぎないこと⁷⁾

このような条件が課せられていたので、フランスの姉妹都市は当初ヨーロッパ内での締結が、大部分を占めていた。

市区町村レベルにおける、フランスの自治体と日本の自治体との姉妹都市提携が盛んになるのは、1982年の地方分権化以降である（表6）。

表6 フランスの地方自治体と日本の地方自治体との姉妹都市提携数の推移 (市区町村)

年	1955 ～ 1960	1961 ～ 1970	1971 ～ 1980	1981 ～ 1985	1986 ～ 1990	(1988)	1991	1992	1993	1994
件数	2	4	7	1	12	(5)	3	3	0	2

(出所：財団法人自治体国際化協会編、『日本の姉妹自治体一覧2005』、2005年、130-131頁)

1988年には、年間で最多の5自治体が姉妹都市提携を結んだ事実は、フランスの自治体にも日本の都市との交流を求める機運が、高まりつつあったことを如実に示す。ディーニュ・レ・バン市もこの趨勢に乗り、さらに、締結の手続きが比較的容易になった1992年の「共和国の地方行政に関する指針法」の公布に後押しされた形で、釜石市と姉妹都市関係を樹立した。

VI 釜石市とディーニュ・レ・バン市との姉妹都市提携後の交流

2006年7月、ディーニュ・レ・バン市との姉妹都市交流について、釜石市に問い合わせたところ、「交流は現在停止状態にある」、という回答を受け取った。釜石市とディーニュ・レ・バン市は2000年の絵画交流以降、交流活動がまったく行われていない状況にある。1994年4月に姉妹都市提携盟約書が調印されてから交流停止に至るまでの、両市の交流の主な活動は下記のとおりである（表7）。後述の参考資料「1. 釜石市とディーニュ・レ・バン市との姉妹都市交流史」と重複する部分があるが、その活動をここで把握しておくために掲載する。

表7 釜石市とディーニュ・レ・バン市との交流史

年	月 日	場 所	活 動 内 容
1995	3月17日～22日	鉄の歴史館	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画61点を展示
	8月4日～10日	市民文化会館	ディーニュ・レ・バン市から送られた児童・生徒の絵画60点を展示
1996	2月20日～25日	釜石市立図書館	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画61点を展示
	9月18日～29日	物産センター	ディーニュ・レ・バン市から送られた児童・生徒の絵画60点を展示
1997	3月5日～10日	物産センター	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画62点を展示
1998	1月7日～19日	物産センター	ディーニュ・レ・バン市から送られた児童・生徒の絵画50点を展示
	3月18日～23日	物産センター	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画35点を展示
	10月31日～ 11月3日		「日本におけるフランス年記念事業開催」 ①ディーニュ・レ・バン市企画展 ・ディーニュ・レ・バン市のパネル写真や資料の展示 ・釜石市とディーニュ・レ・バン市の児童・生徒の交換絵画作品展覧 ②ディーニュ・レ・バン市特産品の展示 ③もっと知りたいタラソセラピー ・タラソセラピーの解説、体験コーナーの設置
2000	2月22日～25日	物産センター	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画49点を展示
	3月14日～16日	物産センター	ディーニュ・レ・バン市から送られた児童・生徒の絵画48点を展示

(出所：釜石市から提供された資料をもとに作成)

1. 児童・生徒の絵画交換

児童・生徒の絵画交換交流は、釜石市とディーニュ・レ・バン市が正式に姉妹都市提携をする以前に、各1回行われているので、これを合わせると6回行われている。この交流が、両市でそれぞれどのように受けとめられ、どのような意味を持ったかについての評価はなされていない。

2. 日本におけるフランス年記念事業

交流事業としては、姉妹都市提携締を結んでから4年後の1998年、「日本におけるフランス年記念事業」として、10月31日から11月3日までの4日間、釜石市でディーニュ・レ・バン市企画展や、ディーニュ・レ・バン市特産品の展示などが行われた。

3. 相互訪問

釜石市側からディーニュ・レ・バン市への公式的な訪問は、姉妹都市提携前の1993年2月に1回あるが、それ以降釜石市代表団という形では行われていない。しかし、2000年3月の私たちの釜石市役所での聞き取り調査によると、1996年釜石市商工会議所が中心となって、ディーニュ・レ・バン市への親善訪問ツアーを計画し、20名の市民が参加したということである。一方、ディーニュ・レ・バン市側は、1994年4月に姉妹都市提携調印式に臨むため、市長一行8名が釜石市を訪れたが、それ以降人の往来はない。

4. 親書を託す

1999年10月4日に、盛岡市の画家と福岡市の写真家が、ディーニュ・レ・バン市を訪問するのに先立って、釜石市長を表敬訪問したことを、『岩手日報』（1999年10月5日付）は伝えている。ディーニュ・レ・バン市の地質学研究所が、アルプ・ド・オート・プロヴァンス県周辺の自然保護地区を紹介する2巻目のガイドブックを出版するに当たり、釜石市を通じて日本人アーティストを募集していた。それに対し日本全国から21名の応募があり、知名度、語学力などから上述の2人が選ばれた。彼らがフランスに行くにあたり、釜石市長はディーニュ・レ・バン市長宛の親書を託した。

5. その他

ディーニュ・レ・バン市役所職員によると、2000年に、釜石市がフランス語の翻訳を委託している会社と共同で、釜石市民をディーニュ・レ・バン市に招待する企画があったが、会社側の都合で中止となったということである。職員から入手した新聞記事のコピーは、2000年8月、ディーニュ・レ・バン市で開催されたラベンダー・フェスティバルに参加した日本女性たちについて伝えている。この女性たちは翻訳会社の関係者である。以下、この記事を引用する。

市場に「日いづる（国）」

三人の若い日本女性が、ラバンド祭から日曜日まで、市のゲストとして滞在している。ディーニュ・レ・バン市と姉妹都市関係にある釜石市から来ている女性たちは、両市の関係の強化に寄与する言語文化センターで働いている。この姉妹都市プログラムに加えて、この魅力的な三人の外交官は、プロヴァンス鉄道と日本でこれに相当する鉄道との協定、および、地質学保護区域の遺産継承や環境保護の諸問題を軸にした学校間交流のプログラムを提案するために来訪した。

(熊本哲也訳)

この記事で言及されている女性たちは、盛岡市にある翻訳会社の関係者で、釜石市から委託されてディーニュ・レ・バン市を訪れたのではなく、私的な立場での訪問である。従って、両市の姉妹都市交流について、ディーニュ・レ・バン市と話し合いをしても、それを釜石市に持ち帰って協議するというにはならなかった。2001年1月、ニースとディーニュ・レ・バン市間を走るプロヴァンス鉄道のディーニュ駅の駅舎で、私たちは三陸鉄道のポスターが貼られているのを見て、奇異な感じを受けたが、それは前年の

夏に翻訳会社の関係者が残していったものだった。しかし、プロヴァンス鉄道と三陸鉄道との協定や提携は、その後話題になっていない。学校間交流についてもしかりである。

Ⅶ 釜石市とディーニュ・レ・バン市との姉妹都市交流停滞の要因

1. 姉妹都市提携の目的の不明確さ

釜石市がフランスのディーニュ・レ・バン市との姉妹都市提携へと進んだ背景には、三陸・海の博覧会にアンモナイト化石群の剝離標本（複製）展示があったことは、すでに見てきた通りである。博覧会でのアンモナイト展示や、ディーニュ・レ・バン市からの技術者などの来訪で、当時の潮流に乗って、釜石市がディーニュ・レ・バン市と姉妹都市提携を志向したとしても不思議はない。しかし両市には、自治体として姉妹都市提携へと結びつける必然性、類似性があったとは思われない。そして、姉妹都市提携の潜在的な契機となった博覧会でのアンモナイト化石群の剝離標本展示の発想も、岩手県が決めたことであった。

三陸・海の博覧会でのアンモナイト化石群の剝離標本（複製）展示の話が具体化し、ディーニュ・レ・バン市の地質学研究所に関係する人たちの釜石市への来訪が続く過程で、両市の児童・生徒の絵画交換交流、そしてディーニュ・レ・バン市から釜石市へのアンモナイト貸与という友好的な状況が生まれた。釜石市長は、姉妹都市提携全盛とバブル景気という時流に乗って、いわば「一発花火」打ち上げといった感じで、ディーニュ・レ・バン市に姉妹都市提携を申し入れた。

従って、姉妹都市提携に先立っての市当局としての体制作り、提携先についての調査、市民の意識調査や意見聴取、さらに姉妹都市交流が持つ意義や効果などの検討など、姉妹都市提携を考える際に最低限必要な事項の確認がないまま、すなわち航路を確定せぬまま船出した。やがて日本のバブル経済が破綻すると、釜石市も多くの予算を姉妹都市交流活動に計上することができなくなった。2000年8月に、翻訳会社の関係者がディーニュ・レ・バン市を訪問したが、その際も釜石市からの助成金は、まったく認められなかった。

2. 距離と言語

釜石市とディーニュ・レ・バン市の両市にとって、地理的な距離の隔たり、日本語とフランス語という言葉の相違も、国際交流の障害となっている。ディーニュ・レ・バン市役所職員も、両市の人と人との交流を阻害している大きな要因のひとつは、距離と往来に要する費用であると指摘した。児童・生徒の絵画交換という交流は両市の間で数年続いたが、友好を深め、相互理解を促進するために、市民同士の直接的な接触を伴う交流は存在しなかった。

3. 経済交流の不成立

ディーニュ・レ・バン市では、姉妹都市提携により、市の特産品を釜石市に売り込むという販路拡大を夢見ていた。しかし、この事に関しても、両市の間で具体的な協議にまでは至らなかった。

4. 市長の交代

1994年釜石市と姉妹都市提携提携を締結した時のディーニュ・レ・バン市長が、翌年1995年の市長選で対立候補に敗れた。新市長は、前市長の政策を継承することを良しとせず、釜石市との姉妹都市交流にも積極的ではない。彼はミッテラン政権下で運輸大臣を務めた人物で、中央政府志向が強く、釜石市との姉妹都市交流の停滞状況を打開する策を講じるとは考えにくい。また、前述のように、ディーニュ・レ・バン市は財政的にも厳しい状態であり、公的資金を姉妹都市交流に向けることができないのも事実である。

Ⅷ 交流復活へのシナリオ

釜石市とディーニュ・レ・バン市が取り組まなければならない喫緊の課題は、姉妹都市交流に関して話し合いを持つことである。この8年間交流がほとんどないという状態なので、話し合いの結果として、姉妹都市関係の解消という結論になることも考えられる。釜石市は外国の都市との姉妹都市締結を、時流に乗る形で一発花火的に打ち上げてみたが、交流を推し進める基盤が脆弱であったために、交流活動がもたらす影響や効果を見ることなく初期の段階で停止してしまった。

姉妹都市提携の「世界平和」という崇高な目的を持ち出さなくても、もっと卑近な例を挙げるならば、直接、間接を問わず異文化に接することは、覚醒を通して自己を見つめ直すことでもある。釜石市がこの姉妹都市交流の意義を再確認することによって、姉妹都市交流の復活という結論が出ることもありうる。姉妹都市関係の継続という場合のシナリオのひとつを以下に示す。

1. 原点への回帰

姉妹都市提携を進展させ、さらに継続させるためには、提携する二つの自治体が共有する理念に基づき、相互に努力することが必要である。釜石市は新しく策定した「スクラムかまいし21プラン」の「基本構想」の第3章「創造性豊かな人を育むまち」で、将来の国際交流に関して、市の考え方を明らかにしている。その第3項「国際交流の推進」の中で、「現在の状況と主要な課題」について触れ、ディーニュ・レ・バン市との国際交流については、「お互いの理解を深める交流について検討する」と明記している。

しかし、その具体策が示されていないように、釜石市がディーニュ・レ・バン市との姉妹都市交流を復活し、活性化する道は決して容易ではない。1994年4月に両市が姉妹都市提携を締結して以降、両市間のささやかな交流のシンボルであった児童・生徒の絵画交換事業も、2000年を最後に途絶えたままである。また、2001年1月に私たちが実地調査でディーニュ・レ・バン市を訪れた際には、ディーニュ・レ・バン市の当局者からも、地質学研究所の担当者からも、両市の姉妹都市関係の将来について、積極的な意見は聞かれず、提携維持についての熱意も余り感じられなかった。

釜石市とディーニュ・レ・バン市の姉妹都市提携の将来に関しては、両市がもう一度1994年の原点に戻り、盟約書の理念に沿って、「教育、文化、産業、経済、スポーツ、観光」などの分野で、検討する時期に来ていると思う。それは、まさに釜石市の「スクラムかまいし21プラン」にも謳われていることである。もし交流を復活するとするならば、最初にしなければならないことは、どのような目的とするのかを、抽象的ではなく、具体的に、さらに詳細に明示することである。すなわち方向性を明確にすることが、最も重要である。

2. ディーニュ・レ・バン市への積極的な発信

国際交流とは相互の交流である。もしも釜石市として、ディーニュ・レ・バン市との姉妹都市提携継続の意志があるならば、釜石市側としてディーニュ・レ・バン市側に、どのような交流を望むのかを提示しなければならない。しかし、ディーニュ・レ・バン市が姉妹都市提携の維持を望むか否かはわからない。そのためにも、釜石市側がディーニュ・レ・バン市側に対して、どのような交流ができるかを、積極的に発信する必要がある。

3. 環境整備

①交流の核となる人物の配置

釜石市としては、ディーニュ・レ・バン市と直接交渉・協議できる担当部局を設置し、さらに、フランス語に堪能で、フランスの社会や文化について深い理解力を持つ人材を確保、もしくは養成しなければならない。第三者頼みは限界があることを、これまでの経験が教えている。

②釜石市国際交流協会

2006年7月1日、釜石市国際交流協会の設立総会が開かれた。これまで釜石市に国際交流協会が存在しなかったが、それはこの市での国際交流活動がまったくなかったということではない。釜石市は港湾都市という性格上、外国の船舶の入港もあり、また水産加工会社には中国からの研修生も来ている。そのため釜石市には常時外国人が滞在している関係から、国際交流協会が設立される以前より、民間ボランティア団体、ロータリークラブ、ライオンズクラブなどが、それぞれ国際交流活動を行ってきた。しかしこれらの団体間では横のつながりがなく、他の団体がどのような活動をしているのか、どのような問題を抱えているのかといったことに関して、情報を共有することがなかった。

それまで釜石市には、市が設置した国際交流推進談話会があったが、市当局の説明によると、「国際交流の推進にあたり、国際交流に関する情報の共有化、情報の受発信機能の整備をはかるため、国際交流協会が必要であり、また、市民参加・協同による民間主導の国際交流協会が設立されるよう積極的に働きかけていきたい」（2006年3月9日開催「第2回釜石市国際交流推進談話会会議録要旨」）ということで、2006年3月9日釜石市国際交流協会設立準備委員会が立ち上げられた。その後準備委員会は4回会議を重ねたが、「国際交流を行うためには、まず自分たちの住んでいる釜石市の歴史を知ることが大切」とか、「国際交流は人づくり。それがまちづくりにもつながる」といった意見が出され、それらのことは協会の規約にも反映された。

釜石市国際交流協会規約

（目的）

第1 釜石市国際交流協会（以下「協会」といいます）は、世界平和と多文化共生社会の実現を理念に掲げ、郷土釜石の歴史、文化及び地域資源を再認識し、発信していくこと並びに異文化との積極的な交流を図ることを目的とします。

（事業）

第2 協会は、第1に規定する目的を達成するため、次の事業を実施します。

- (1) 国際理解の推進に関する事業
- (2) 人材育成に関する事業
- (3) 在住外国人の支援と共生に関する事業
- (4) その他協会の目的に必要なと認められる事業

釜石市国際交流協会の会長は、「協会の理念は世界平和と多文化共生社会の実現。ありのままの釜石を見てもらい、普段着の国際交流を進めたい」と挨拶で述べた（『河北新報』2006年7月4日付）。釜石市国際交流協会は、当初個人会員54名と団体会員5団体で構成された（2007年3月31日現在個人会員59名、団体会員6団体）。協会の事務局を釜石市総務課国際交流室内に置き（2007年6月2日、「釜石市総務課内」に変更）、まず国際交流に関する情報を交換・提供するコーナーの設置、「とっておきの釜石」を外国語で紹介する中高生による手作りマップ作成、在住外国人との交流事業などを決めた。

残念ながら、釜石市国際交流協会の設立に当っては、姉妹都市交流への言及が全くない。確かに、2006年3月27日自治行政局国際室長名で、「地域における多文化共生推進プランについて」が各都道府県に通知されてから、地域の国際化に関して、最近の地方自治体の最大の関心事は多文化共生であり、岩手県の自治体もこれ一色のような様相を呈している。会長の挨拶に多文化共生社会という言葉が含まれているのが、何よりの証拠である。釜石市が多文化共生社会の実現をはかる場合、中国、韓国、フィリピンなどアジアへの注目度が増すと予想される（表8）。

表8 釜石市の主要外国人登録国籍別人員推移

各年度12月末現在 (人)

国 籍	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年
中国	30	32	34	82	83	63	64	79
韓国又は朝鮮	30	31	29	29	31	31	27	28
米国	6	7	3	1	2	2	2	4
ペルー	5	5	5	5	5	4	4	3
フィリピン	4	5	4	4	7	9	13	13
その他	15	19	17	17	29	29	28	37
総 数	90	99	92	138	157	138	138	164

(出所：岩手県、「外国人登録国籍別市町村別人員調査表」)

多文化共生が前面に出て、市民の目がアジアへ向くと予想される状況においては、フランスへの関心を高める環境作りは、困難を極められると思われる。1998年から2005までの8年間の推移を見ると、岩手県全体でもフランス国籍の在住者は、10人を超えることはない。いわんや、釜石市の場合は1人でもフランス人が在住する年は、きわめて稀である(表9)。

表9 釜石市と岩手県におけるフランス国籍登録人員推移

各年度12月末現在 (人)

	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年
釜石市	1	1	0	0	0	0	0	1
岩手県	5	6	5	7	5	10	10	7

(出所：岩手県、「外国人登録国籍別市町村別人員調査表」)

こういう現状であるからこそ、本気でディーニュ・レ・バン市との交流を再開するのであれば、前述の核となる人物の釜石市国際交流協会への働きかけが肝要である。国際交流協会は、目的として「異文化との積極的な交流を図ること」を掲げ、国際理解の推進に関する事業を実施すると明言している。いったんその趣旨を理解すれば、国際交流協会は、姉妹都市交流において大きな役割を果たしうる潜在能力を持っている。

③各種機関との連携

ロータリークラブ、ライオンズクラブなど国際交流に積極的な機関への働きかけも、横のつながりを強固にする上で大切である。また、「フランス文化理解月間」などを開催することができる図書館の力も看過することができない。むしろ、書籍をはじめとして、さまざまな視覚教材が揃っている図書館の働きは大きい。さらに、学校などの教育機関における取り組みも重要である。将来において姉妹都市交流の担い手となる子どもたちへの早期教育は、継続して行われなければならないことのひとつである。

Ⅹ おわりに

釜石市は近代製鉄発祥の地として一時期繁栄を極めたが、1985年の釜石製鉄所第二高炉の休止とそれに続く1989年の第一高炉の休止に伴い、9万人を数えた人口は4万人にまで激減し、市勢の衰退を経験してきた。若年層の人口流失が続き、65歳以上の高齢化率が3割を超す釜石市において、希望を語るができるのか。希望を持つことの意味を探るために、東京大学社会科学研究所が「希望学プロジェクト」に取り組んでいるが、調査対象地のひとつとして釜石市が選定された。プロジェクトリーダーの玄田有史准教

授は、釜石市を選んだ理由を次のように述べている。「製鉄やラグビーの街として全国に名前を知られ、近代日本の産業発展と、その後の展開が集約的な形で現れる釜石市が最適地と考えました。釜石は製鉄所の合理化を経験しながら、資源循環型社会の実現を目指す『エコタウン事業』など、新たな希望を創造しようとしています。種はまかれつつあり、どう育つか、見つめたいと思いました」（『朝日新聞』2006年9月24日付）。2006年9月24日から30日に、市民、高校生、市役所職員、かつて製鉄所で働いていた人々、ラグビー関係者などへの聞き取り調査（本調査）が実施された。「釜石に希望はあるか」と題された中間報告会が2007年3月3日に開催されたが、玄田氏は、「釜石には希望がある。地域の誇りや志といったものを、みんなが持つことが大事だ」と語った（『朝日新聞』2007年3月4日付）。さらに、共同研究者の中村尚史准教授が調査結果の概要を報告したが、「▽地域社会と中核企業の依存と反発の複雑な関係を維持してきた▽企業間や産業間の関連性が薄く市内外のネットワーク形成が弱い▽地域全体の希望といえる目的が共有されていないなど」を指摘した（『岩手日報』2007年3月4日付）。

1992年に開催された三陸・海の博覧会は、会場が釜石市、宮古市、山田町と分散していること、交通アクセスがあまりよくないこと、宿泊施設も十分に整っていないことなど、不利な条件のもとで開催され、失敗は目に見えているという大方の予想を覆し、動員予定数70万人の約3倍201万人の入場者を集め大成功を収めた。大手広告代理店の手を離れた博覧会は、文字通り市民による手作りのイベントとなった。博覧会推進局長は、成功裏に終わった博覧会が釜石市に残したものとして、下記を挙げている。

何と言っても住民に自信が沸き上がったことが大きな財産である。特に釜石市は新日鉄の企業城下町として発展してきたこともあり、企業に頼みにさえ行けば以前は何でもできていた。それが博覧会を機に、我々がやらなければ誰がやる、我々の手で釜石を再生させようという、大きな熱意が市民の間に沸き起こった。今年も国際トライアスロン大会を市民の手で立派になし遂げた。やればできるという自信が沸いてきている。企業城下町としての気質がほぼ消えたという大きな財産が残った⁸⁾。

三陸・海の博覧会を契機として、自分たちで何かを成し遂げることができるという自負の念を醸成している釜石市民が、この博覧会と直接的なつながりを持つディーニュ・レ・バン市との姉妹都市交流にも、そのきっかけさえ生じれば、全力で取り組んでいくと予想される。そのきっかけとは、繰り返しになるが、目的の明確化である。三陸・海の博覧会が地域振興を目指して行われたとするならば、姉妹都市交流は何を目指して行われるのかが市民に明示される必要がある。あるいは市民がその必要性を自覚する必要がある。さらに、東京大学社会科学研究所の「希望学プロジェクト」中間報告で指摘された、ネットワーク形成や、目的の共有化が図られれば、釜石市の姉妹都市交流は停滞を脱し、少なくとも漸進が可能になると思われる。1858年に日仏修好通商条約が結ばれてから来年で150周年になるが、それを記念して、日仏間で姉妹都市提携を結んでいる自治体の長を、フランス東部のナンシー市に全員招集し、姉妹都市サミットを開催する計画が進行中であると聞く（『読売新聞』2007年10月29日付）。このイベントを通して、釜石市とディーニュ・レ・バン市との交流に、新しい展開がもたらされるかもしれない。

謝辞

この研究は、平成12年度ならび平成13年度岩手県学術研究振興財団の助成研究「岩手県の国際交流：姉妹都市との交流の現状と展望」の成果の一部である。

インタビューや資料収集にあたり、下記の方々には多大な支援と協力をいただいた。ここに記して、感謝の意を表す。

釜石市市役所総務企画部総務課：小林俊輔氏（行政係長兼国際交流室係長）、白澤渉氏（行政係・国際

交流室主事)、石山貴子氏 (行政係・国際交流室主事)、ディーニュ・レ・バン市役所：Maryline Feraud氏 (地域・開発・出納担当)、オート・プロヴァンス地質学研究所：Jean-Simon Pages氏 (所長代理) (肩書や所属は、調査を行った当時のものである。小林氏と臼澤氏については2000年3月、石山氏については2005年10月時点のものである。Feraud氏とPages氏については、現地調査を行った2001年1月時点のものである。)

熊本哲也氏 (岩手県立大学准教授)

注

- 1) 釜石市、『釜石市の概要』、2006年12月、3頁。
- 2) 電通、『月間アドバタイジング 7月号』第432号、1992年6月、28頁。
- 3) 神田隆、「三陸・海の博覧会が残したもの—その成果と課題—」、『東北経連月報』第323号、東北経済連合会、1993年12月、13頁。
- 4) 地域産業の振興や国際交流を推進するために、1988年通産省は、地域の主体性に基づいた博覧会の開催を促進する「特定博覧会 (ジャパンエキスポ) 制度」を開設した。
- 5) 財界研究所、『財界』、1992年6月30日、126頁。
- 6) 財団法人自治体国際化協会、「フランスの地方自治体の国際交流—その理念と現状—」、『クレアレポート』第45号、1992年3月30日、6-7頁。
- 7) 『クレアレポート』第45号、2頁。
- 8) 神田隆、『東北経連月報』第323号、13-14頁。

参考資料

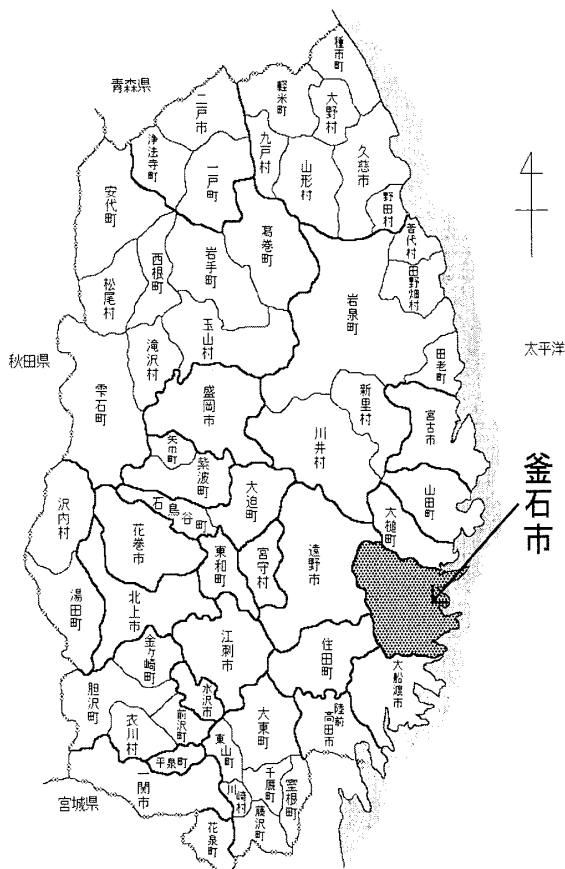
1. 釜石市とディーニュ・レ・バン市との姉妹都市交流史

年	月 日	内 容
1992	5月10日	三陸・海の博覧会に出展する「アンモナイト化石群の剥離標本（複製）」の設置工事のため、オート・プロヴァンス地質学研究センター所長一行8名の技術者が来釜
	7月3日	三陸・海の博覧会の開会式に参加するため、アルプ・ド・オート・プロヴァンス県議会第一副議長一行9名が来釜。「アンモナイト化石群の剥離標本（複製）」を釜石市に保存するため、技術協力の意向が示される。また、児童・生徒の絵画交換などの国際交流について話し合う。
1993	2月8日	釜石市助役を団長とする一行7名がディーニュ・レ・バン市などを表敬訪問。「アンモナイト化石群の剥離標本（複製）」を見学する。ディーニュ・レ・バン市より、アンモナイトの実物などの貸与協力の意向が示される。
	10月16日	アンモナイトの化石を釜石市に20年間貸与するとの意向が、フランス側より示される。
	11月22日	「アンモナイト化石群の剥離標本（複製）」設置工事のため、地質学研究センター所長一行8名が来釜。アンモナイトの化石8個の貸与を受ける。
	11月26日 ～28日	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画58点の展示会を、釜石市民文化会館で開催する。
	12月18日	同上展示絵画をディーニュ・レ・バン市へ発送する。
1994	1月1日	釜石市長よりディーニュ・レ・バン市長へ、姉妹都市提携及び来釜についての親書を送る。
	2月7日	釜石市国際交流推進談話会で、ディーニュ・レ・バン市との姉妹都市提携が承認される。
	2月11日	ディーニュ・レ・バン市長より釜石市長への、姉妹都市提携についての親書を受け取る。
	3月2日	ディーニュ・レ・バン市において、釜石市から送られた絵画58点の展示会が、アルプ・ド・オート・プロヴァンス県議会展示室で開催される。
	3月17日	平成6年3月釜石市議会定例会において、ディーニュ・レ・バン市との姉妹都市提携について可決される。
	3月28日	ディーニュ・レ・バン市より、児童・生徒の絵画60点を受け取る。
	4月13日	ディーニュ・レ・バン市議会において、釜石市との姉妹都市提携について可決される。
	4月15日 ～20日	ディーニュ・レ・バン市より送られた児童・生徒の絵画60点の展示会を、釜石市民文化会館で開催する。
	4月19日	ディーニュ・レ・バン市長一行8名が来釜
	4月20日	釜石市において、姉妹都市提携調印式を挙行政
1995	3月17日 ～22日	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画61点の展示会を、鉄の歴史館で開催する。
	8月4日 ～10日	ディーニュ・レ・バン市より送られた児童・生徒の絵画60点の展示会を、釜石市民文化会館で開催する。
1996	2月20日 ～25日	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画61点の展示会を、釜石市立図書館で開催する。
	9月19日 ～29日	ディーニュ・レ・バン市より送られた児童・生徒の絵画60点の展示会を、物産センターで開催する。
1997	3月5日 ～10日	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画62点の展示会を、物産センターで開催する。
1998	1月7日 ～19日	ディーニュ・レ・バン市より送られた児童・生徒の絵画50点の展示会を、物産センターで開催する。
	3月18日 ～23日	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画35点の展示会を、物産センターで開催する。

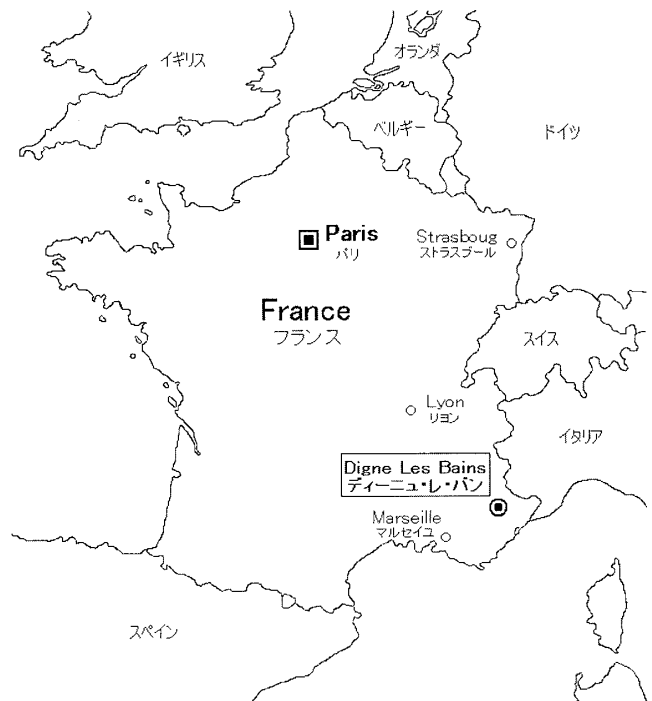
年	月日	内 容
1998	10月31日 ～11月3日	「日本におけるフランス年」記念事業開催 1. ディーニュ・レ・バン市企画展：ディーニュ・レ・バン市のパネル写真、資料の展示 2. ディーニュ・レ・バン市特産品コーナーの設置：ディーニュ・レ・バン市から送られた特産品の展示 3. もっと知りたいタラソセラピー：タラソセラピーの解説、体験コーナーの設置
2000	2月22日 ～25日	釜石市よりディーニュ・レ・バン市へ送る児童・生徒の絵画49点の展示会を、物産センターで開催する。
	3月14日 ～16日	ディーニュ・レ・バン市より送られた児童・生徒の絵画48点の展示会を、物産センターで開催する。

(出所：釜石市から提供された資料をもとに作成)

2. 釜石市の位置



3. ディーニュ・レ・バン市の位置



(2004年度末の岩手県の市町村地図である。)

(2007年11月28日原稿提出)

(2008年2月4日受理)

A Study of the Sister-City Relationship between Kamaishi City, Japan and the City of Digne-les-Bains, France

Tomoko Sato and Hajimu Sasaki

Abstract JAPAN EXPO IN IWATE '92 was held in 1992, making Kamaishi City as its main site. One of the special features of this EXPO was the exhibit of the replica of the ammonite slab which had been found in the stratum of 150,000,000 years ago. Through the Center of Geology of Alpes de Haute Provence, which had assisted Kamaishi City extensively in installing the replica of the ammonite slab, Kamaishi City learned of the existence of the City of Digne-les-Bains where the Center is located. After a couple of friendly mutual visits, the mayor of Kamaishi sent a personal letter to the mayor of the City of Digne-les-Bains proposing to have a sister-city relationship between the two cities concerned. The City of Digne-les-Bains responded amiably, and the two cities established the sister-city relationship on April 20, 1994. The first few years after the conclusion of the pact of the sister-city relationship saw the exchanges of paintings of young children and pupils of both sides, but the exchanges have been in a state of suspension since 2000.

This paper describes the sister-city relationship between Kamaishi City and the City of Digne-les-Bains. It begins with a close investigation of how the two cities encountered each other; Kamaishi, a harbor city with its 150-year history of iron industry, and Digne-les-Bains, a city with its archaeological resources at the foot of the Alps. The second section deals with the track of the sister-city relationship, focusing on how the exchanges have developed. A scrutiny reveals that the relationship between the two cities came to a standstill soon after the initial stage. Finally, the causes of this premature suspension of the relationship are examined. The article concludes by proposing some ways to restore and revitalize the friendly relations of the two sister cities.

Key words Kamaishi, Digne-les-Bains, sister-city relationship, international understanding, ammonite